法話

蓮如上人ご誕生六百年記念法要を迎えるに際して

滋賀教区　彦根組　清徳寺
野瀬善隆

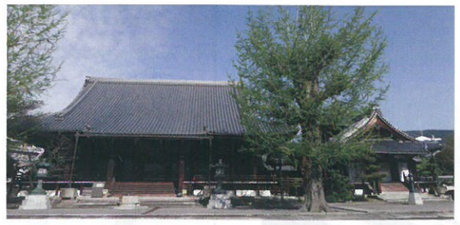
◎上人のご生涯◎

蓮如上人は応永二十二年（一四一五）春、京都東山の大谷本願寺で本願寺第七代・存如上人の長子としてご誕生。幼名を布袋丸。六歳の暮れ、お母さんが本願寺を出てゆかれました。それ以降、父存如上人の内室如円尼のもとで成長されました。武家出身の継母は厳格な方でした。加えて、当時の本願寺は窮乏した経済状態にありましたので、幼少にして物心両面にわたってのご苦労でした。

十七歳の夏、京都・東山・青蓮院でお得度され、長禄元年（一四五七）、四十三歳の六月父存如上人の死により、本願寺第八代を継承されました。

五十一歳の時には、二度にわたり比叡山の衆徒に大谷本願寺を破却され、五十四歳の三月には、落ち着き先の堅田を攻められました。世間的なものの言い方をすれば、決して幸せといえる状況ではありませんでした。

五十七歳の四月、越前の吉崎に赴き、坊舎を建立されましたが、いろいろあって、六十一歳の八月、吉崎を退去され、若狭・丹波・摂津を経て河内の出口に落着きました。六十四歳の時、山城の国山科に坊舎の造営を始めました。京都を追われて七年あまり、京都に落ち着くことが出来ました。



▲山科別院本堂　右は中宗堂

◎生きる力◎

蓮如上人のご生涯は、波乱の連続でありました。しかし、十五歳で一宗興隆の志を起こされた上人は、浄土真宗の根本のお聖教である『教行信証』を中心にして、宗祖・親鸞聖人、覚如上人など先師の著述を書写・研鑽されました。このことが蓮如上人の生きる力となられたことでありましょう。

『宿善は阿弥陀仏のお育てのことである。だから、宿善はありがたい』（御一代記聞書二三三）と仰せられました。どのようなことがあっても、阿弥陀仏のお育てといただかれ、「宿善ありがたし」といただかれたことは、大きな力であったことでしょう。

世間の多くは、仏教は死ぬ時の用意、死んでから先のことと受け取っているようです。これは仏教だけでなく、親鸞聖人がお勧めくださる浄土真宗も同じように、死ぬ時の用意か死んでから先のことだと受けとられているように思われます。

◎他力の救い◎

阿弥陀仏は、凡夫を救いたいという願いをもって、凡夫と同じ高さにたたれ、法蔵菩薩と名乗られました。蓮如上人のお言葉をいただきますと「阿弥陀仏は、はかり知れない昔からすでに仏である。本来、仏であるにもかかわらず、人々を救うための手だてとして法蔵菩薩となってあらわれ、四十八の誓願をたてられたのである」（聞書九九）とあります。法蔵菩薩となられた阿弥陀仏は、衆生を救う誓いの先ず初めに、「十方衆生」と誓われました。十方衆生とは、みんなということ、みんなということは、一人も残すことなくということであります。これが出来た人、あれが出来た人というと、出来ない人は除かれることになります。出来ない人が除かれたのではみんな・一人も残さず、ということになりません。出来るか出来ないか、そんな条件はつけません。一人も残すことのないように、と先ず誓われました。

次に、信心も称名もあなたがしなければならないことはみな、仏のほうで仕上げます。あなたの救いには一切の条件は付けません。全部仏の一人ばたらきによる救いを仕上げます。この誓いは、あなたが先です、と結ばれます。

◎救いは今から◎

「弥陀を信じておまかせする人は、南無阿弥陀仏にその身を包まれている」（聞書百）とも「南無阿弥陀仏の主になる」（聞書一三七）ともお示しであります。

浄土真宗は、臨終のお迎えを期待する教えでもありません。すでに南無阿弥陀仏と仏に包まれているのです。迎えという言葉で表現すれば、すでに迎えられているということです。

この頃の感覚で言えば、すでにお迎えの車に乗せてもらっているということです。迎えに来てくれた人にどこまで行って下さいとはいいません。向こうから来たのですから、何もいわなくても向こうに着きます、ただ「ありがとう、ありがとう」で向こうに着きます。

「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と念仏申す人生を歩ませていただきたいと思うばかりであります。

親鸞聖人がお勧めいただいた他力の救いを、六百年前にご誕生された蓮如上人によって、ごく身近な教えとして、生活の中の教えとしてお示しいただきました。

蓮如上人のご誕生あればこそと、ご誕生六百年の記念法要をお待ち受けさせていただきます。

「蓮如さん」について

■ひとことで言えば、親鸞聖人が伝えてくださったお念仏のお心を、だれにでもわかるように伝えられたご一生でした。いつでもご門徒とともにお念仏を喜ばれた方でもありました。

「蓮如さん」と親しく呼ばれるのは、そんなご一生であったからでしょう。

蓮如上人のお木像。中宗堂に安置されています。蓮如上人自身の作と伝えられています。

■「中興の祖」とよばれる蓮如上人のご功績は数多くありますが、大きなご功績は次の点にまとめられます。

第一は独特の伝道活動です。

「御文章」（御文）という文書伝道によって、親鸞聖人の説かれたお念仏のみ教えが各地にひろがっていきました。

四十七才から八十四才までの間に二百六十通以上を残されています。

第二は「正信偈和讃」を朝夕の勤行として制定されたことです。

今まで僧侶だけがお勤めする勤式を、僧俗ともにお勤めをするというものです。このことにより浄土真宗は飛躍的に繁栄し、今もなお各家庭で勤められているという画期的なものでした。

親鸞聖人の『教行信証』の「行巻」末尾の「詩偈」のお念仏と、親鸞聖人の「ご和讃」を組み合わせたものでした。

第三は「山科本願寺」を建立されたことです。

山科本願寺は文明十三年（一四八一）に建立されました。

山科本願寺の土地は京都にも近く本願寺門徒の多い近江の地に近いという絶好の地でもありましたが、天文元年（一五三二）に法華宗の宗徒らによって焼かれました。

それ以来二百年の間荒廃していましたが、享保十七年（一七三二）に本願寺派も大谷派も再建、別院として今日まで護持されています。

「鹿子の御影」（かのこのごえい）（福井県超勝寺蔵）

蓮如上人が6歳のときでした。父の存如上人が正妻を迎えることになり、母上はわが子の「鹿の子の小袖」姿を絵師に描かせ、その絵をもって夜、寺を出ていかれました。

蓮如上人の御廟所が、門と築地に囲まれた木立の中にひっそりとたたずんでおり、この御廟所を挟んで江戸時代中期に東・西本願寺山科別院が建立されました。

本堂南脇に寄り添うように中宗堂があります。ここには吉崎と同様、蓮如上人の由緒深い別院の証として別に堂宇を設け、上人のお木像をご安置しています。本願寺ならびにその教団が偏に蓮如上人の真宗再興の志によって創設された歴史的事情をよく示しています。

今回のご誕生600年法要では、そのお木像を本堂にご動座して法要がつとめられます。